熟柿

『新墾』47-1号

みづの辺をゆく謐かさに人を恋ふ無形と云へど滅びがたかり

とり落さば計かるなきかなしみの量にして雪夜鶏卵を弄ぶなり

誰の掌か触れて崩れむ愛しみは熟柿ひとつのうつしみにさへ

凝らす眼にも逸らせる眼にも瞭らかに熟れし果肉は裡にしたたる

理のそともなへて超えゆく魂をまぶすがに降り細かき夕雪

雪

『新墾』47-2号

まはだかの樹樹の羞恥につつみ降る雪の方向のきりきり変る

吾が裡に棲みつく怠惰見のがすとさみしき冬かまたも重ねて

重ねゆく寡黙につなぐやすらぎは胸の奥処のどこにか澱む

すがすがとレモンに甦へる朝なり吾が愛憎のきはどかりしも

急ぎゆく他界にあらねくやしみの遺せる意志をつつむがに雪

鏡面

『新墾』47-9号

風荒ぶ夜も抗はずききたむる双つの耳のみみたぶ火照る

驕りゐるこころあらはに映しゐて吾が姿見は陽の位置にあり

歩みきてつね踏みとどまれる位置なりき今日昼月のひとつを仰ぐ

素足にて踏める畳の感触に夏はいよいよひとりならしむ

藤棚に花は垂りをりみづからに背くこころの未だならずも